

## 地方都市における

### フランス語学習コミュニティ構築の可能性

#### Création de communautés d'apprentissage dans la préfecture d'Ehime

越智 三起子

OCHI Mikiko

Université de Matsuyama

mochi?cc.matsuyama-u.ac.jp

都市部と異なりフランス語学習のための施設数も指導者の数も限定される地方都市においては、学びの多様性という側面においてはマイナス面が多いと考えられる。しかしながら、地域と連携した学習コミュニティ構築という点では、そうした限定された学習環境というデメリットを逆手にとってメリットへと転じさせることは必ずしも不可能ではない。本稿では、愛媛県におけるフランス語学習コミュニティ構築のための試みを具体例として紹介し、他都市においても応用可能なコミュニティ形成のプロセスについて提言してみたい。

#### 1. インターネットを利用したクラスコミュニティ構築の試み

都市部と地方都市の学習環境格差をうめる手っ取り早いツールとしてすぐさま念頭に浮かぶのはインターネットであるが、パソコン保持率は別として、Twitter、あるいはFacebookをはじめとするSNSの地方における利用率はまだまだ低いことが指摘できる<sup>1</sup>。インターネットサイト使用に関する技術的な問題は、教師によるインストラクションによってすぐさま解決できるものではあるが、日常的にインターネットにアクセスする習慣を持たない学習者をインターネット学習に参加させることは至難の業である。そのため、まずは学習者の自主的参加を促すツールとしてのQuizletの可能性に注目してみたい。

##### 1-1. 新たな学習空間形成ツールとしての Quizlet

Quizlet は、学習と遊びの要素を兼ね備えたオンライン型の単語帳作成サービ

---

<sup>1</sup> 2012年4月に新入生70名を対象にコミュニケーションサイトの利用率に関して筆者が行ったアンケート調査によれば、アカウントの保持だけでなく日常的に利用していると回答した学生は、Twitter 17%、Facebook 6%であった。

## Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

スで、学習者は音声を聞きながらの綴り字練習やテスト、単語の意味を暗記するためのマッチングゲームやスペリングゲームなどを活用し、ドリル学習を行うことができる。フランス語に関しては、動詞活用・単語の反復練習によってその習得効果が最大限に期待できるが、そうした技能の定着に果たす有益性以上に筆者が着目するのは、「単語帳の共有」と「グループ形成」という Quizlet がもつシェア機能である。以下松山大学の初年度フランス語クラス（39名）での活用例を報告したい。

対象クラスで教科書として使用している *Pierre et Hugo*（白水社）は、単語帳部分が空白になっており、学習者自身で内容を書き込む構成となっている。そのため初回授業においてパソコンを使用し、Quizlet の使用方法と教科書名によるグループ登録を行い、一つの課に対して3～4名の学生を指示、宿題としての意味調べ、授業前の板書に加え、自宅での Quizlet への単語入力を指示した。「単語帳の共有」機能により、作成された単語帳はクラス全員で共有されテスト前の復習に利用されるため、指示された学生たちは責任感をもって入力することとなる。さらに「グループ形成」によって単語帳の編集可能メンバーを設定できるため、グループメンバー、教師による間違い訂正が可能となる。また、このグループ化によって、教師は学生の単語セットの学習度合いを確認できるというメリットを得られる。一方学生は、画面上に各セットを速く修了したチャンピオン名が表示されることで競争意欲を刺激されるが、その効果はライバルたちが身近なクラスメイトであることからより一層の刺激となる。加えて、グループ内チャットも可能であるため、使用方法がわからない学生がチャットで助けを求めるといった場面もみられた。

実際のところ、技術習得的なオンライン単語帳というその特性上、Quizlet のもつ学習機能自体にフランス語学習に対する学生の内発的な動機の誘発を期待することは難しい。インパクトは大きいが一時の遊具的な様相をおびやすいネット学習ツールに対する継続的アクセスの問題に関しては、セットに登録されている動詞活用と単語を用いた小テストを定期的に授業内で行っていくなどの外的誘因が必要となるであろう。しかしながら、Quizlet はネット上のコミュニティと実際のクラスコミュニティをリンクさせ、そこで学生達が学ぶために共同できる教室プラスαの学習空間を提供するという点で多くの可能性をもっており、その活用法が今後検討されるに価するツールであると考えられる。

## 2. 教室外コミュニティとの関わり

未だ社会性を学ぶ経験を多く持たない学生たちにとって、彼らを取り巻くコミュニティはクラスやサークルといった閉鎖的なものとなりがちである。語学教育の目標の一つを異文化理解という他者との積極的な関係構築ととらえるならば、クラスというコミュニティは、大学内フランス語学習者コミュニティ→大学外のフランス語学習者・フランス文化関連コミュニティ→世界のフランコフォンコミュニティとの関係構築と拡大の道を辿っていくのが自然であり、そうしたより大きい世界との共同を学ぶことが重要となるであろう。そのために必要となってくるのは、第一にフランス語が自分と関係のある現実世界において機能している言語であることを実感させ、次いで、フランス語を中心とする教室外コミュニティの発見を通して他のコミュニティと自分との関連性を認識させることである。以下、教室外コミュニティとの関わりという点で有益であったと思われる事例を二つ紹介したい。

### 2-1. 教室外コミュニティとの連絡ツールとしての La poste サイト利用

まずは、教室にいながらにして他のコミュニティからのリアクション体験が可能な例として、La posteが運営するPère Noëlのサイト<sup>2</sup>上から、サンタクロースに手紙を書かせ、実際にフランスから送られてくるクリスマスカードを入手させる（無料）という方法を紹介したい<sup>3</sup>。実施対象は、2年生以上を対象とするリーディングクラス（毎年20名前後）で、授業時間は3コマ利用した。

1. グループごとに分担して、フランスの子供達を書いたサンタクロースへの手紙文の翻訳・サイトの使用手順のフランス語読解を行う。
2. 自己紹介と条件法を使って、各自作文。教師による間違いチェックの後、実際にサイトにアクセスし入力。
3. サンタクロースから届いた手紙の翻訳。

繁忙期でなければカードは一週間程度で届くが、手紙の翻訳作業は冬休み空きの授業に設定しておいたところ、内容を知りたく自分で訳してみるものも出てきた。クリスマスの時期に子供達がサンタクロースあてに書いた手紙に返事を届けようとするフランス郵便局の取り組みと日本との文化差を実感させるのに有益であり、何よりも実際に手紙が届くということのリアル感がダイナミックな学びとなり、学生たちに及ぼす影響は大きい。

### 2-2. 県立美術館との対話型美術鑑賞ワークショップ

次に、大学外フランス関連コミュニティとの接触という点で有益であった愛媛県美術館協力による対話型美術鑑賞ワークショップ参加の試みを紹介したい。松山大学は市内中心部にあり、たいていの主要文化施設が徒歩圏内にあるという地方都市ならではの利便性をもつ。その地理的メリットを利用して、これまでは教師が単独で学生たちを授業時間内に美術館で開催される展覧会に引率するという形で学外活動を行うことがあった。2011年度は「19世紀フランス絵画の流れ 印象派の誕生」展覧会の愛媛県美術館での開催に伴い、フランス語の授業が集中する一曜日を選択し、フランス語4クラス合同で美術館訪問を行うことにした<sup>4</sup>。愛媛県美術館では、美術館スタッフ・作品ガイドボランティアと一緒に一つの作品をじっくり見てグループで自由に語り合う「対話型鑑賞プログラム」を教育普及政策として実施しており、学生達はこのプログラムに参加後、自由に館内を見学するというかたちをとった。

訪問後のアンケート調査によると、80%以上の学生がこの時点で美術館訪問

---

<sup>2</sup> 毎年11月頃に [www.laposte.fr/](http://www.laposte.fr/) のサイト上に公開される。通常は、[www.laposte.fr/pere-noel/](http://www.laposte.fr/pere-noel/) の URL で公開。

<sup>3</sup> 実際にフランスのサイトにアクセスし個人情報の書き込みを行うため、大学側に確認し、学生にリスクを説明し了解を得られれば利用に際して問題はないという回答を得た後授業で活用した。

<sup>4</sup> チケットは生協スタッフの協力の下美術館訪問前の授業での教室での販売を行い、現地集合・現地解散のかたちをとった。

## Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

が初めてであり、以下の二点に集約されるような回答が目立った。まずは、自分とは無縁と思われていた美術館という文化施設が自分の住む世界にリアリティをもって入ってきたことに関する喜びと意外性を語るもので、この驚きは、案内してくれるガイドの存在、さらには一般の訪問者を目のあたりにすることによって、フランス絵画を核とするコミュニティが存在することへの気づきと驚きにも波及している。つぎに、対話型プログラム参加で他者の意見を聞くことによって、同じ絵でありながら人によって見え方、感じ方、考え方が異なるという多面的思考の意識化が行われ、また自らが語る場面では、正誤の判定を受けることなく、自由に人前で自分の考えを説明し受け入れてもらえるという体験を経ることで、語ることの喜びに気づいたという回答が目立った。こうした体験は、単にフランス語やフランス文化に対する知識を豊富にすること以前の段階として、コミュニケーションの本質を理解させ、文化を中心とするコミュニティの発見とそこへの参加というリアルな経験をさせるツールとして学生のモチベーションアップに貢献するであろう。

### 3. 大学外コミュニティとの連携の可能性

これまで、大学を中心としてフランス語学習のコミュニティ形成に有益と思われる方法について検討してきたが、以下愛媛県今治市における社会人を対象としたカルチャースクールでのコミュニティ構築の例について報告したい。

#### 3-1. 地域映画館・地元企業のタイアップによるフランス映画上映会

筆者が社会人に対して講義を行っているのは、県庁所在地である松山市、そこに隣接する今治市においてである。両市においてカルチャー教室の母体となっているのは、新聞社・ガス会社であり、地元密着型の企業として住民の認知度は高い。愛媛県におけるフランス語学習可能施設は多くないため、必然的に筆者の元に両市におけるフランス語学習者が集中し、随時 60 名程度の社会人が筆者の担当するいずれかのクラスに属しているというのが現状である。上映会は、実施当時シナリオを読んでいたクラスがあった今治市で『シェルブールの雨傘』が公開されるのを機に行われた。今治市には、大型のシネマコンプレックスと小規模ではあるが良質の映画を上映するミニシアターが存在するが、上映会は後者の特定の上映回を借り切るという形で実施された。通常映画上映会を企画する際には、映画会社よりフィルムを借用し自主上映会の形で実施、あるいは DVD を持ち込んで場所を確保し上映会を行うといったような形態が考えられるが、これらの形態は資金的・労力的また著作権といった面からも乗り越えていかなければならない課題が多々ある。しかしながら、一定の上映回を借り切るという方法であれば、通常鑑賞料金は必要となるが、それ以外に追加費用は必要なく、また貸し切りという限定された空間であるため上映前に監督・俳優に関する予備知識を与えるなど講義的要素もおこめるといったメリットがある。むろん、対象フランス映画の公開にあわせて日程を組まなければならないという制限は出てくるが、担当者の話によれば、古くない映画であれば、リクエストによって上映に協力できる可能性は小さくないということであった。

元来それほど大きな集客力を持たない地方都市における小さな映画館であるため、例えば 10 名程度であっても確実に集客が見込める内容の映画を選択して上映することにデメリットは見当たらず、リクエスト上映という方法に関しては映画

## Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

館側も積極的である。私的見解であるが、こうした催しは、フランス語学習者コミュニティによる関係産業のバックアップという経済的観点から、学外映画館で行われるのが理想であろう。学習者コミュニティ側にとっても、フランス映画上映の地方都市における誘致の可能性を高め、一般の観客に鑑賞の機会を提供することでコミュニティ拡大のきっかけを得るというメリットが生じる。また、今回の上映会では利用しなかったが、上映会の実施を後から知ったカルチャークラスの運営企業担当者から、多額でなければ次回より協賛金の支出が可能であるという申し出を受けた。実際のところ、クラスを通して知り合ったメンバー間で生まれる良質の企業イメージは、口コミが命である地方の中小企業・店舗にとってもメリットとなる。フランス語を通して関わりをもったいくつかのコミュニティがそれぞれ何らかの恩恵を被るというこの今治市の事例は、学外におけるフランス語を軸とした地方コミュニティの拡大の可能性という点で検討に価するのではないだろうか。

### 4. おわりに

以上紹介してきた事例は、いずれも実施するのに空間的な制限をうけないという点で共通している。つまり、地方と都市の格差をうめるに等しく、学内と学外コミュニティの壁を取り払う可能性ももっているものである。Quizletのグループに社会人を、学外上映会に学生を参加させることは容易であり、そうした交流によってそれぞれのコミュニティは活性化するであろう。現状では、大学の施設やシステムを使って学内コミュニティと学外コミュニティを結びつける場とすることは至難の業であるが、インターネットを活用し、教師が学外施設に目を向け関わり合おうとする意識をもつことで、ある程度まで現実世界の空間的束縛からは逃れることができるのである。インターネットを利用した学習コミュニティ構築に関しては、筆者はネット上にてフランス語・文化関連記事執筆、メールマガジン発行という形を通じて職業的にフランス語コミュニティを運営する機会を得た<sup>5</sup>が、その経験上、Twitter, Facebook, Mixiなどのコミュニケーションサイトは非常に多くの可能性を提示するであろうが、元来匿名性とヒエラルキーのなさという平等な横の広がりを得意とするネット上のコミュニティの中に、教師という縦の社会に属する存在が関わりをもっていくことはなかなか一筋縄ではいかないように思われる。むしろ教師はインターネットのもつ平等性の特徴を理解しながら、情報発信・情報収集・情報共有にTwitterを利用し、意見交換の場としてFacebook, MixiなどのSNS、さらには交流拡大のためにViadeoのようなビジネス用SNSを併用することの方が有益であろう。また、自作教材の共有という点でいえば、インターネット上のフランス語教材リンク集であるLe Point du FLE<sup>6</sup>のようなサイトの日本語版の作成も待たれるところである。学内・学外・ネット上、それぞれ異なる空間で試行錯誤しているフランス語学習者同士を結びつけ、フランス語を核としたコミュニティのさらなる拡充のためにも、教師もまた閉ざされたコミュニティで現状維持をはかるのではなく、開かれた世界へとコミットしていく必要があるだろう。

<sup>5</sup>生活総合情報サイト All About : <http://allabout.co.jp/gm/gt/1419/>

「ガイド」とよばれる各分野の専門家が記事を執筆し、サイトは関連企業による広告収入で運営される。筆者は2005年から3年間フランス語ガイドを担当。

<sup>6</sup> <http://www.lepointdufle.net/>